

アチョワ事件簿—あるいは『テソ民族誌』異聞
梅屋 潔（東北学院大学教養学部）



アチョワでテソの子供たちと（1998年8月）

東北学院大学教養学部助教授（社会人類学・文化人類学）。1969年静岡市生まれ。慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了。一橋大学大学院社会学研究科後期博士課程単位取得退学。ウガンダ・マケレレ社会調査研究所外来研究員、社会科学部客員研究員。国際協力事業団専門家、日本学術振興会特別研究員（平成8年度DC2、平成14年度PD）を経て、2005年より現職。憑依・妖術信仰などオカルトを中心に世界観、文化的秩序観念を研究。共著書『憑依と呪いのエスノグラフィー』『文化人類学のレッスン—フィールドからの出発』。



歓迎を受ける JICA 事前調査団一行（1998年8月）

I

私がウガンダの東部、ケニアとの国境にほど近いトロロ県でアドラ民族（Jo-P'Adhola。以下民族名の接頭辞をすべて省き「アドラ民族」「テソ民族」とする¹⁾）の調査に従事していた1998年、長島信弘先生がウガンダに来る、という知らせが村に届いた。JICA 国際協力事業団（当時。現在は JICA 国際協力機構）の事前調

査。「貧困撲滅戦略の構築と農村の総合的発展」というプロジェクトだった。北東部テソ民族と中央部、そして西部の三箇所を実態調査、比較する予定だという。

8月25日に空港まで迎えにいった大使館の内山さんの先導で首都カンバラにあるシェラトン・カンパラ・ホテルのロビーに到着した一行は、プロジェクト・リーダーの長島先生のほか、JICA ケニア事務所の宮川昌明所員、平原専門員、飯田専門家、田原範子さん（四天王寺国際仏教大学）だった。ロビーでそれを迎えたのは松田素二さん（京都大学）、河合香史さん（静岡大学）、波佐間逸博さん（京都大学大学院）、そして私だった（うち、松田さん、河合さん、波佐間さんはケニアからの別行動）。私は先生と握手して、初対面の人々に自己紹介した。

「長島先生のところの学生で梅屋といいます。松竹梅の「梅」（うめ）に屋根の「屋」（や）と書きます」

この自己紹介のクリシェに長島先生はすかさず「それに、不潔の「潔」（けつ）」と続けた。みなどう反応したらいいかかわらずあいまいな笑いを浮かべている。

「あと30分ほどでこのロビーに集合して大使館²⁾でブリーフィングです。やっと着替える時間があるくらいですが」大使館の内山さんの説明に「もう着替えねえよ、日本の常識は世界の非常識だってことを大使館の人にももっとわかってもらいたいなあ」と長島先生は呟き、「田原さんも着替えなくていいですよ」と、ジーンズからスカートに履き替えようか悩んでいた田原さんにささやく。これには、大使館、JICA 関係者は苦りきっていた。

「私もフィールドに同行できますか？」「たぶん大丈夫だと思う」内心こおどりをした。

こうして、事前調査に便乗して、カタクウィ県（ディストリクト）、カペレビヨン・サブカウンティ、アチョワ・キャンプをたずねた。

トロロのロック・ホテルで昼食をとった。ロック・ホテルは、その昔まだ JICA が、OTCA 海外技術協力事業団だった当時の専門家、森淳先生（大阪芸術大学）と長島先生がはじめて出会った場所である。全員プレーン・オムレツ。そのほうが早く注文品が出てくると思ったのだが、その逆で、オムレツ用のフライパンの数が限られているので、ずいぶん手間取った。この厨房で料理していたのは、私が調査基地にしている村から通っているオケチョというアドラ民族のコックさんである。

ソロティ・ホテルで前泊して向かったアチョワ・キャンプ。そこには、先生の著書、『テソ民族誌—その世界観の探求』³⁾（以下『テソ』と略す）で読んだことのある人物が30年近い年齢を重ねて生活していた。ステイーヴン・オウジロット⁴⁾や弟で先生の助手をつとめ

¹⁾ jo は、「人々」をあらわす接頭辞で par は「場所」をあらわす接頭辞である。長島先生は、著書で「テソ」「テソ人」「テソ族」としてきたひとびとを最近「人々」をあらわす接頭辞 i を加えて「イテソ民族」と呼ぶようになっている。そこには深い背景があると推察されるが、わたしは本稿では自分の調査する民族の表記法と同じように、民族の接頭辞をすべて省き「テソ」ないし「テソ民族」あるいはなじみのある「テソ人」としたい。それは、接頭辞を残した「バガンダ民族」（ba＝「人々」）や「バガンダ民族」（bu＝「場所」）よりは「ガンダ民族」の方が混乱がより少なからうという判断による。

²⁾ 正式にはケニアと兼轄されており、当時大竹米蔵臨時大使が駐在していた。

³⁾ 長島信弘『テソ民族誌—その世界観の探求』（1972年、中公新書、以下『テソ』）。

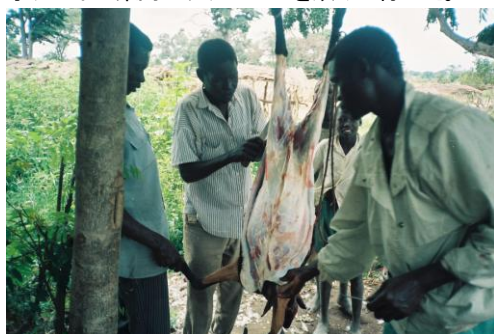
⁴⁾ 『テソ』での表記はステフェン・オジイロット Ojiirot だが、

たオコリモ⁵が生身の体を伴って存在していた。もっとも、アチョワ・キャンプは、本に描かれているフィールド、「ウスク」ではない。1971 年からのクーデターによるアミン政権成立以来、ウガンダの治安は乱れ、『テソ』のなかではウスクで公務員をしていたオウジロットも、家族を連れてキャンプに移住していたのだ。ここには一人暮らしの老人も多く、もはや『テソ』で描かれた「エテム」「アテケレ」や「エケキ」「エカレ」といった原理に支えられた社会ではなかった。

「ここが、世界で一番安全なところです」一行に告げる。おそらくは、三十年来の友人オウジロットの住まいは、先生にとってはそうなのだろう。単純な比較はできないにせよ、果たしてそのようなつきあいがこれからの私とトロロの友人との間で生まれるだろうか。素直に感銘を受けた。

「この出された椅子に座らないと大変な失礼に当たります」小屋の奥から木製の折りたたみ椅子がいくつも運び出された。屋敷の片隅ではオウジロットの指示で山羊が屠られている。

その後一行は役場で説明会を開いたようだが、「君は正式のメンバーではないから遠慮してくれるか」とのことばもあって、オウジロットの長子のダニエル・オチュネの案内でテソビールを飲みに行った。



オウジロットの指示で山羊を屠るアチョワの人々

II

当時一橋大学大学院博士課程に在籍していた私は、1997 年から長島先生とも縁の深いウガンダでの調査をはじめていた。最初の調査は健康を害して失敗。第二回目は一年ほど継続して滞在することが出来たが、日本学術振興会の特別研究員（DC2）としての資格は1999 年 3 月末日で終わろうとしていた。滞在費はもはや赤字。大家さんに家賃を待って貰って結果的にはウガンダ人に借金している状況だった。せつかくフィー

本人の自署が現在 Ojrot であること（i はひとつ）、長島先生も最近はおジロットと表記しているが、私の耳には単母音 [ɔjirot] ではなく二重母音 [oujirot] と聞こえることなどから本稿ではこう記す。

⁵ 『テソ』ではオコリモン。同じく自署 Okolimo と綴っていることなどが根拠だが、この指摘に対し長島先生から、ひとつは英語の影響による変化であり、オコリモンの語の一部であるエモンには、本来特別な意味があると聞かされた覚えがある。

ルドにも馴染んできたのに、このタイミングで帰国したくなかった。帰国したあと追調査をおこなう費用の当てあがるわけでもない。いや、帰国後の生活費の当てもまったくなかった。待っているのは身内への返す当てのない借金だけである。

それまでトロロ県では、DANIDA や unicef の調査や援助プロジェクトに慣れきった住民を前に研究計画の説明に毎回失敗し、「お前のプロジェクトは俺たちに何のメリットを与えてくれるんだい」と聞かれ困っていた私は、帰国寸前の長島先生におそろおそろ聞いてみた。

「なんとか、トロロ県も比較参照点に入れてはもらえませんか。人口密度も昔から高いし、HIV 感染率も深刻でこのプロジェクトにはぴったりだと思うのですが。そうすれば、私もこのプロジェクトに何らかのかたちでかかわることができるのですが」

「そんな可能性はありません。予定に入っていないから」ぴしゃりと撃退された。リサーチ・プロポーザルをいくつも書くようになった今は、この申し出がいかに非常識で、先生の拒絶がいかに当然だったか理解できる。



オウジロットの長子ダニエル・オチュネ（1998 年）



アチョワ・キャンプで。テソビールを飲む（1998 年）

それでもいろいろお考えになったのだろう。何らかのかたちでプロジェクトに関ることができるよう、手を打ってくれたようである。しかし、まだ何の成果も挙げていない大学院生を公的性格の強いプロジェクトに関わらせることには反対も多かったらしい。非公式に説得材料をつくる意味もあったのか、その約 4 カ月後の 1999 年 1 月上旬から約 3 ヶ月のあいだ、長島先生の現地調査のお手伝いをする事になる。いわば私設

助手である⁶。このことがほぼ決まり、わたしに知らされたのは、事前調査団が9月6日にウガンダ・エンテベ空港をとびたち、日本に帰る前日、9月5日の夜のことだった。

こう書くとまるで「金目当て」のようだが、事情は少し異なる。本誌「自著を語る」で長島先生が言及しているように⁷、私は先生の『テソ』を古本屋やウェブ上の「日本の古本屋」などで計5冊手に入れ、繰り返し読んでいた。マニアである。複数買い求めたのは定価280円のこの本の値が上がることを見込んでのことではない。繰り返し読むのですぐに傷んでしまうからである。

この本には、通常書かれることの少ない調査の具体的な手続きや経緯がこと細かに書かれていた。はじめて海外でフィールドワークを行おうとしていたときにはなおさら、この本の記述が参考になった。この点、人類学者自身が透明人間のように扱われていた通常の民族誌や、形式的な調査入門書とは一線を画していると思われた。そこには著者が調査者として直面する資金の問題や現地の人びととの葛藤や悩みがあった。異文化を理解することの困難も、人類学と一生付き合っていくべきかという悩みも、淡々と書きつけられていた。当然のことだが、「テソ」だの「ウスク」だの「オジイロット」だの「オニヤ」だの、固有名詞がやたらと多いこの本は、新書であるにもかかわらず決して読みやすいとはいえず、当時の私の理解がさほど深かったとも思われない。ただ、漠然とはあるがこの「わからなさ」には、意味がある、と直感していた。ともすると、これがフィールドワークの本質なのではないか。しかし、この著書は、正直に書かれているだけに、精読を重ねても最後の最後で、リアリティというか、実感が伴わなかった部分がいくつかあった。それはおそらく経験しないとわからないものなのだろう、と考えていた。

『テソ』には「わからない」という表現が随所にちりばめられている。「わからない」ことを「わからない」と書いてある本は稀であると思う。「彼が信頼できるのは、知らないことを知らないといえるまれな才能をもっていることだ」⁸と本書で高く評価されている被調査者「オジイロット」は、ある意味では知ったかぶりを拒否する、本書を執筆する著者の目指した理想像だったとらんでいる。

ともあれ、何度も読んでその細部をそらんじている本の著者と一緒に連れ立って、そのフィールドを訪れる、という経験は、望んで得られるものではなかろう。「金目当て」ではないもうひとつの目的は、ここにあった。一般に人類学者は自分の行った調査の実態につ

いて著書のなかで沈黙しているだけではなく、実際に自分のフィールドに他人が入るのを嫌う傾向にある。また、フィールドワークの方法論については誰からも、体系的には何も教わった覚えがなかった。実感のなさ、というものが絶えずつきまとっていた。

視察的な意味合いが強い前年の事前調査とは事情が異なり、今度は本格的な調査である。先生が、どんな調査をするか、間近で見ることができる。そうした意味で、その時のカタクウィ行きは、非常に例外的であり、私にとり意義深いものであった。何度読んでも手に入れられなかった最後の実感のようなもの、それをこの目で、体で実感するチャンスだったのである。



1998年8月オウジロットと再会する長島先生（左）



落花生をむいて食べるアチョワの子供たち

III

首都カンパラでの打ち合わせや買い物を済ませ、1月20日午前6時40分に今度は長島先生の運転するランドクルーザーでふたたびアチョワに向けて出発した。現地調査を開始する準備のためである。

カンパラで購入したのは、たとえば以下の物品である。オリーブオイル、ニシンの缶詰、醤油、アルミフオイル、ネガティブホルダー、包丁とぎ、キホルダー、テーブルナプキン、キッチンペーパー、スポンジ、録音テープ、ワイン、スピリット（以上スタースーパーマーケットおよびインド人経営の食器店で購入）、洗面器、バケツ（小）石けん入れ、石けん、キャベツ、レモン、ニンニク（以上ナカセロ・マーケット）、ロープ（サウリヤコ・マーケット）。男性用・女性用トイレの表示（マーケット・ストリート）。メモの下には先生の格言として「いつまでもあると思うな肉と酒、無いと思うな事故と借金」と書かれている。のちにこれは、金言というより予言だったことを当の先生ともども思

⁶ 私設助手としての謝金はウガンダに到着直後に1,000USD前払いされた。

⁷ 長島信弘「自著を語る—長島信弘『テソ民族誌—その世界観の探求』1972年、中公新書」中部大学国際人間学研究所機関誌『アリーナ』創刊号、2004年、197-9頁。

⁸ 長島信弘『テソ』44頁。

い知らされた。

このリストの特徴的なところに解説を加えると、オリーブオイル、ニシンの缶詰は、先生のこだわりである。のちにカンパラに一人で出た際に注文品の水煮がなく、仕方なくトマトソース煮を買って帰り、探し出せなかったことをひどく怒られたことを覚えている。食材へのこだわりは、「酒とタバコ以外で不健康になってはいけない」という先生の立ち読み健康医学が反映されている。

途中ソロティで調査基地をオフィスとして機能させるのに必要なベッドや机などを購入あるいは注文した。多くが輸入に頼る既製品より、自前の材木からつくる注文品のほうがずっと安価なのは驚いた。ウガンダではマホガニーをふんだんに使った家具をあちこちでみかける。質もよい。

いわゆる什器はありあわせのもので間に合わせるものかと思っていたので（実際私はそうしていた）、たいそう驚かされた。それらは単に自分たちの研究環境を整えるためだけではなく、後に合流する研究協力プロジェクトのカウンターパート、マケレレ大学の研究チームのためだった。つまりベッドもマットレスも毛布も枕もシーツもランプも盥も蚊帳も、やがて来るはずのアキレス・セワヤ（社会学）、ジャグウェ・ワッダ（社会学）、ステラ・ネーマ（医療人類学）らの分とあわせると都合5人分必要なのである。一般に都会に住むウガンダ人は、地方生活に複雑な感情を持っている。気持ちよく来てもらうには無知な私には過度と思われるほどの心遣いが必要だった、というのは、後にわかったことである。

カタクウィの役所で挨拶をし、アチョワに向かう。ソロティを少し外れるとターマック（アスファルト舗装）のないいわゆるマラム・ロードを60キロ、ウェラというところでカタクウィの役場へ至る道を外れると次第に道も悪くなってくる。



アチョワまでの道は舗装されていないマラム・ロード

林立する小屋を見遣りながら、「おまえらはビンボ一だ」アチョワの役場が見えてくるあたりで先生が叫んだ。冗談とも本気ともつかない、おそらくは30年以上テソの人々とのつきあいのなかで醸し出されるような、何ともいえない感情がこもっているようだった。

アチョワ到着時には、予想していなかったことが起きた。なぜかわれわれに先行していた大型バスと一緒にアチョワに停まったのである。ハイエースの乗り合

いタクシーの便数も少ないここに大型バスが停まるのは初めてだそう。たちまち人だかりができ、「白人が連れてきてくれたんだね、ルルルルルル、アイヤイヤイヤイ」喜びのユールレイション⁹がこだまする。これはこれからわれわれの行うプロジェクトとの関連を誤解させるのに十分な偶然だった。



1999年1月21日われわれと偶然同時についたバス

IV

それから約10日間、われわれは主に調査基地の設備を整える作業を行った。1998年の8月25日から9月6日に事前調査でアチョワを訪れたときに、彼らに調査基地となる小屋を建てておくように依頼し、その資金を預けていたはずだった。しかし、小屋は建っていない。何らかの誤解が行き違いがあったらしく、改めて小屋を建てるための費用を見積もってもらう。「セメントが必要だ」とオウジロット。最寄り（約65キロ）の都市ソロティに引き返して注文品を購入し、アチョワに引き返す。それを何回繰り返し、いくつかのセメント袋を運搬したのだろうか。注文していたベッドやデスクもできているものからランドクルーザーの屋根の上に積んでぎりぎりとロープで縛り上げ、運搬した。このような調査基地と呼ぶにふさわしい基地をつくり上げるのを私は見たことも聞いたこともなかった¹⁰。ウガンダ東部のトロロ県での調査では、調査者が現地に入ること、現地が変わってしまわないように、できるだけ目立たないようにしよう、と考えていたので、出費も控え、できるだけ薄汚れた格好をしようとしていた（住んでいたのはたまたま知り合った大家さんのおかげで上等だったが¹¹）。その意味ではナイーブな人類学者＝透明人間というモデルにきっちりめられていたわけだ。

いまではそれは欺瞞だと思っている。「モルモットは

⁹ ululation。喜び、悲しみ、警戒などを表現する叫び声。

¹⁰ これは完全なわたしの勉強不足である。特に『テソ』（122-7頁）にも登場する片寄俊秀氏の『ブワナ・トシの歌—東アフリカの湖と村びとたち』（1976年、教養文庫、社会思想社）を読んでいたのは、失敗であった。

¹¹ 最初は知らなかったが、私の大家は夫婦ともども大人物だった。夫は、2004年ムバララ大学学長となったラファエル・オウオリ教授、妻は、アバッチ県弁務官（RDC=Resident District Commissioner）をつとめるマリー・オウオリ・ニヤケチヨ氏である。

透明とはいけない¹²のだ。彼らとわれわれの生活の場でもあるフィールドに、どれだけ違和感を感じ共感を持ちうるのか。自分も含めて調査対象である、いやむしろ「対象」と呼ぶことがあまりに不適切なかたちで調査経験は構成されてゆくのだと。

小屋の中には仕切りがあり、入り口から向かって左に先生が陣取り、右の空間が私の占有空間となった。オウジロット一家のアレンジで、夕食は鶏のスープとアタパ。「うまい鶏だ」（次の日はナマズのスープだった）。すこしして暗がりを小屋の表へ出ると、オウジロットの息子（スティーヴン・オウジロット。同姓同名なので以降ジュニア、シニアと呼びわけることにする¹³）が、暗がりに立っている。異母兄のダニエル・オチュネも一緒である。われわれが顔を出すのを待っていたようだ。「こうなんだよ、テソっていうのは。遠慮深いんだ」先生のテソ自慢。用件は無心だったようだ¹⁴。

その晩、隣室からとくとくという液体の物音がした。つられて隣室を訪れ、ひとり飲んでいた先生とワラギ¹⁵を飲んだ。そのうち瓶から勝手に注いで飲んでいたら一言「じろり」と非難された。勝手に飲んではいけない、ということか。「食事の面倒は見るが、酒は自分で何とかしなさい」とのこと。その晩は蚊が多く、小屋の泥壁にとまる蚊を二人がかりで競って叩きつぶしたが、勝負は先生の圧勝におわった。この晩の蚊は、のちにプロジェクトに甚大な被害を及ぼすことになる。

30日に初めてアチョウ・マーケットを見学した。朝早くソロティ方面からトラックが何十台も押し寄せ、壮観であった。キャンプ横の広場はそれぞれの見世で一杯になる。広場に併設された小屋は食堂となって、持ち出しもできるので、ちょっとした仕出し屋である。マーケットでは「ざる」と「ござ」を購入した。牛売り場にはカリモジョンの姿も見られる。『テソ』で指摘

された近隣民族カリモジョンの牛略奪は、激化こそすれ解決する気配はなかった。カラモジャ地方が激的な気候で牛の放牧が困難な乾季には、降水量の多いカタクウィなどに居候を決め込み、雨期になると、テソ民族の牛を奪って去っていくのだ。マケレレで知り合ったカリモジョン民族の私の友人は、「日本にも牛はいるのか」と訪ね、「いる」と答えると「それは全部われわれのものだから、返してもらおうか」と凄んだものだ。マーケットを取り仕切る（お金を出してその権利を得て出店した店子から場所代を得る）男は、「彼らは、テソから牛を奪って行って、質を落として売りにくる」と愚痴る。相場は年をとっているものは一頭 100,000/=（ウガンダシリング）¹⁶、若いものは 300,000/=なのだそう。また自然死した牛は少し安いとか。ちなみに山羊は大きさにより 6,000 から 20,000/=、豚は 30,000 から 60,000/=。

この日、はじめて先生の雷が落とされた。食事の準備をしようとした際、近くにいなかったからである。マーケットでマンダジ（5 個 50/=）やカレーの団子（1 個 50/=）、サモサ（2 個 50/=）のようなものを買い、食堂もあるからと、そこで昼食は済ませたら、などと提案しようとしていたのだが、とんでもない考え違いだった。先生の、「立ち読み健康医学」は徹底しており、避けられないとき以外は、栄養バランスも考えた自炊をしようとしていたのである。

その間、ダニエルとジュニアを助手に雇用することが正式に決まった。ジュニアは主に先生づきで、ダニエルは私。この決定が非常に慎重に行われたのは、ひとつには『テソ』に書かれているような助手にまつわる苦労体験があるのだろうが、それだけではない。私の印象でも、実際テソの人々は、完全に個人主義的で直裁に言えば「めんどくさい」人たちだった。つきあいはじめが肝心なのだ。しかし、この点については、老獪な先生といえども、交渉や駆け引きに「勝っている」とは到底思われなかった。この意味では、『テソ』で書かれた百戦錬磨の「物欲の強さ、というよりそれを強要的に表現する伝統的行動様式」¹⁷との戦いは、30年後にまた繰り返されたといえる。

家事を依頼することになったアキテン・イマチュレットは、賃金交渉の際、満足のいく金額が提示されないと、「祈りが足りなかったからもう一度」と言って派手なお祈りをはじめ、そのあとに再交渉して、調査を支える助手たちに迫る好条件を獲得していた。この彼らのきわめて個人的な「物欲」というか「所有欲」「獲得欲」は、いうなればみなが個人事業者であるかのごとく旺盛であった。

ダニエルに聞いたことがある。「いま長島先生からいくら給料をもらっているか誰かに話しますか？」

¹² 長島信弘「自著を語る—長島信弘『テソ民族誌—その世界観の探求』1972年、中公新書」中部大学国際人間学研究所機関誌『アリーナ』創刊号、2004年、198頁。

¹³ この地域の同姓同名の多さには、先生もあきれていて“you are stupid!”と言っていた。川田順造にならって命名を「あやかり」と「ちなみ」に分けるとすれば（川田順造、1988年、『聲』筑摩書房）、テソ人は、ほかの多くのアフリカ社会と同じく、「ちなみ」の論理に大きく傾いている。だから30年前長島先生が訪れたことに「ちなみ」、ナガシマノブヒロと名付けられた子供が何人もいる。さらにこの後生まれたスティーヴン・オウジロット・ジュニアの子は、スティーヴン・オウジロット・ジュニアと名づけられた。

¹⁴ 後に先生が『特別フォーラム「無心の壁—アフリカ人の個人的援助要請とのしぎあい：その意味を探ろう」』日本アフリカ学会第41回学術大会（於：中部大学、2004年5月30日）を主催し、展開した議論（長島信弘、2006年、「アフリカ人の個人的援助要請の意味を探る」『貿易風』（中部大学国際関係学部論集（1））171-82頁）はこうした豊富な体験に支えられている。

¹⁵ パナナから蒸留したジンのような酒。「ウガンダ・ワラギ」として市販されているほか、村などでつくられている地酒がある。

¹⁶ 1USDは1,240.2ウガンダシリング（1998年）、1,454.8（1999年）、1,644.5（2000年）、1,755.7（2001年）、1,738ウガンダシリング（2002年）。

¹⁷ 長島信弘『テソ』9頁。

「話すものか。人間（マン）はみんな泥棒。オウジロット・シニアにも、ジュニアにも話さない」

ダニエルはこのとき、恋人と暮らしており、子供もいたのだが、花嫁代償を支払っていなかった。これは現在のウガンダではさして珍しいことではないが、私の調べているアドラ民族の間では、当人も親も、すぐには払えなくても、やがては払う、というジェスチャーをしめすことが何より重要である。ところがテソではこのジェスチャーをダニエルもシニアもまったく示していないらしく、地方行政レベルの裁判沙汰になっていた。

ここでは子供の問題は子供のものであり、親の問題は親のもので、それぞれ独自に処理され、依存関係は乏しいようである。もちろん、集まって住んでいるからにはそれぞれの相互扶助めいたものはそれなりにあるのだが、背後に働いている論理はきわめて個別的、個人主義的なもののようには思われた。後に10件ほど観察できたLC1¹⁸レベルのコート・ケースでも同様のことが言えそうで、例えば親であれ何であれ、被告と原告という当事者二人以外の名前が賠償その他のために持ち出されたことは全くなかった。



オウジロット Jr.と同名の息子（2004年）



集まってきたウスクのひとと談笑する

また、一度ジュニアを伴ってウスクにも足を伸ばし

¹⁸ ウガンダの地方行政は狭いものからLC1、LC2、LC3、LC4、LC5（Local Council）と呼ばれ、それぞれが、ヴィレッジ village（ゾーン zone あるいはサブ・パリッシュ sub-parish という俗名があるところもある）、パリッシュ parish、サブカウンティ sub-county、カウンティ county、ディストリクト district（県）に対応する。

た。そのときの状況は先生の最近の論文「最後のアサバン—ウガンダ国イテソ民族の成人式」¹⁹に簡単に触れられているとおりである。「顔に見覚えのある一人の老女が私の手を握って言った。「ナガシマ、皆死んじゃったよ。」」²⁰という現場に居合わせていた。その後、墓の写真撮っている先生の写真が残っている。

残念なことに記録に残っていないが、その後その昔J・ヴィンセントが都市の調査したことがあるブゴンド²¹を訪れて町が完全に消滅しているのを目撃し嘆息したこともある。



滅びた都市、ブゴンドは漁村となっていた

V

設備がほぼ整った2月1日、もうひとりの専門家である田原さんを迎えにカンパラに向かった。2日エンテベで田原さんと合流し、カンパラで買い物。私は事前に行動をともにしていたのである程度の文脈は共有していたが、あとから合流した田原さんにしてみれば、すでに何を購入するか決められていたことでかなり面食らったらしかった²²。

¹⁹ 長島信弘 2003「最後のアサバン—ウガンダ国イテソ民族の成人式」『中部大学国際関係学部紀要』No. 31, 17-32。

²⁰ 長島信弘 2003、上掲論文、14頁。

²¹ 長島信弘『テソ』22頁、Joan Vincent 1971, African Elite: The Big Men of a Small Town, New York: Columbia University Press、『テソ』には「ブドンゴ」とある。「ブドンゴ」という地名もウガンダに存在するが、西部の地名なのでこの場合は誤植であろう。

²² 田原さんのフィールドノートの記録によると、自転車二台（24インチのもの84,000/=、22インチのもの82,000/=）、マットレス三つ（27,000/=）を購入。それ以外にウガンダに入っただけで、合計444,500/=を支出したという。その内訳は、小屋建設費260,000/=（結局田原さんの滞在時には完成しなかった）、ストーブ、蚊帳、ランプ、タオル、やかん、フック、ござ、ジェリカン4つ、ジャー、カップ、ロープなど184,500/=（2007年1月26日電子メールによる私信）。



1999 年ウスクを訪れ、知人の墓の写真を撮る長島先生

以下、メモにある2月3日から4日の買い物リスト。
マットレス 52,000/=、タオル 20,000/=、アルカリ乾電池 43,200/=、コーヒー15,000/=、ベッドシーツ 24,000/=、ハンガー1,500/=、平皿 2,200/=、包丁 8,000/=、フライパン 6,000/=、アボカド、トマト (500 グラム) 800/=、ジャガイモ (1 キロ) 600/=、キャベツ、なす、たまねぎ、ピーマン各 1 キロ、各 500/=²³。

2月4日、早朝出発。ホテルに着くと田原さんが「先生、マラリアだよ！」となぜか明るく教えてくれた。あの夜、アチョワの小屋でワラギを飲みながら潰しあい競争をした際の蚊が先生にマラリアをもたらしたのだ。私は免許を持っておらず、田原さんは国際免許をもってはいるが、アフリカで運転したことはないとのことで、われわれは先生に延期を申し出た。先生は、ふらふらなのだろうが、「オフィスに荷物を搬入しないと」と繰り返す。「5日には、挨拶まわりだ」とも。

一度言い出した先生に翻意していただくことはできなかった。先生の運転で、予定通りカタクウィを目指すことになった。早くも出発の挨拶に訪れた大使館の駐車場の壁で「ゴリラランド・サファリ」社のトヨタ・ランドクルーザーのバンパーをちょっとがりがり擦ったものの、傍目にはしっかりしているようにみえた(後で聞くと助手席の田原さんには、違って見えていたようである)。

ムバレ・タウン間際では、私にも先生の具合が悪いことがわかっていった。タウンにはいる最後のコーナーでは、あまりに急角度でスピードを落とさず曲がるので、道行く人が振り返ったほどだ、と田原さんはいう。先生は、「マウント・エルゴン・ホテルで休憩して、おれの様子を見よう」と言った。熱はかなり高いようである。

そこで誰かドライバーを雇ってソロティかアチョワまで行ったほうがよい。ドライバーには、謝金と帰りの運賃を支払えばいいではないか、と思いつき、提

案したのだが、採用されなかった。

その間田原さんが、制止も聞かずにランドクルーザーの運転席に乗っていた。先生と同じく言い出したら聞かない人のようだ。普段日本ではオートマのトヨタ RAV4 を運転しているとのことで、マニュアルのランドクルーザーの運転は心配だったが、ムバレ中心部まで行って戻ってきた。「かんたん、(運転も) たのしい」とのことで、心配は心配だが、最後はプロジェクト・リーダーである先生の判断でとにかくソロティに向かうことになった。

ソロティ・ホテルに着いたときは、もうふらふらだった。万が一倒れたら支えようと肩を貸せるよう、寄り添うように部屋まで歩いた。自動車から荷物を出そうとすると、「ワインを降ろしてくれ。それが飲めるかどうかで、おれの様子を見よう」という。ご注文どおりワインを降ろして部屋まで持っていった。

ところが、である。その後一時間あまりして、部屋で額のタオルを交換していた私にふたたび先生は言った。

「ウメヤ、車からワインを降ろしてくれ、飲めるかどうかでおれの調子を見る」

「先生、すでに降ろしてそこにありますが」「そうか」

結局その日は飲めはしなかった。

その晩は、田原さんと交代で看病をした。バーに引き氷があるかたずねた。「どれくらい欲しいんだ」という問いに「オール！」と答えた表情がおかしかったと、田原さんには後々までからかわれた。

30 分ごとにタオルをかえていたのだが、そのときの先生にとってそれは早すぎると感じられたようだ。「ありがたいんだが、眠れそうになるとタオル交換で起こされる」そうだ。

先生は熱にうなされながら常に、5 日に約束していた説明会と、機材搬入について気にしていた。残念なことに、携帯電話は当時ソロティやカタクウィまでは普及していなかった²⁴。

思い余って、「われわれで機材搬入はやりますから」と先生を説得した。

ソロティ・ホテルに紹介されたエングルの病院に行くことをすすめるが先生はまたしてもそれを拒絶。薬だけ処方してもらってくる。

²³ メモにはないが、マンゴーを買ったはずだと草稿に目を通した田原さんに指摘された。確かに、長島先生のマンゴーとフラスク(保温ポット)に入れたつめたい水へのこだわりは相当なものがあったから、そうかもしれない。メモにないところを見ると、予定になかったものをその場で気に入って買った可能性もある。

²⁴ 1995 年にセルテル社が廉価な携帯を持ち込んで以来、急速に MTN、マンゴーと三社が競合する一大市場となった。



私の長島先生の似顔絵をもとにアリコが描いた絵

VI

問題の事件は、2月6日に起きた。前日の2月5日、朦朧としながらも心配する先生をホテルに残して、マーケットやスーパーマーケットで購入できたものと機材を積んでアチョワに向かう。田原さんは、先生を心配し、私に残るように主張したが、私は田原さんの一人での運転に反対し、同行することになった。まずアチョワに行き、オウジロット・シニアに先生の病気を報告し、説明会の延期をお願いする。その後田原さんとシニアは田原さんが下宿する予定のアクム（オコリモの屋敷がある村）に向かい一泊した。翌朝、約束通り午前9時に田原さんはアチョワに迎えに来た。「ベアトリス」（アムロン）が私に会いたいとの伝言。アクムに住むオコリモの娘たちは私を長島先生の実の息子と信じている、とは田原さんの言。しばらく後になって先生の似顔絵を描いて田原さんを通じて彼女らにプレゼントしたら、その似顔の顔を模した「カリモジョン・ウーマン」という絵をもう一人の娘アリコ・フランセスが返してくれた。

その日はちょうどマーケット・デイで、アチョワには市がたくさん立っていた。田原さんが見たいというので、一回りだけ、と念を押し、約10分後にアチョワを出発した。午前11時にはソロティ・ホテルで先生と合流する約束だった。

時間的な余裕はあるはずだった。田原さんも運転に慣れ、車の調子も快調だった。私達は長島先生の噂話をしていた。今でも内容まで事細かに覚えているが、ここでは書けない。アムリアとの分岐点を左折し、マーケットへ向かう自転車や徒歩の人々が途絶えようかというあたりで、その事故は起きた。

突如視界が閉ざされ、草木がなぎ倒される音がひとしきりして、天地が何度か逆転し、最後にかしゃん、と軽い金属音がした。事故であることはすぐわかった。瞬間的に重傷を覚悟した。

ランドクルーザーが縦転（横転ではない。後に三回転したことが判明）してひっくり返ったのだ。

気がつくと、私は、さかさまになったランドクルーザーの天井に胡坐をかいている状態だった。ベルトをしていなかったの、空中に浮かんだままほとんどどこにも衝突せずに、着地したらしい。

真っ暗のなか私は叫んだ。

「怪我はないですか」

しばらくして、私、田原さん、ソロティに用があった乗っていたオコリモの娘のアムロン、全員が仰向けになったランドクルーザーの扉の割れた窓から脱出することができた。窓ガラスは割れていないところもあったので、粉々になった一部から這い出す。

「ジェットコースターよりは怖くなかったねー。うーん、…でもこの負債、わたしどうしよう」

田原さんは軽口を叩いたものの結構深刻な顔をしていた。最高級のランドクルーザー。なおの見込みはなさそうだ。取り乱した私達は、とんちんかんなことをしていた。田原さんは燃料にまみれた車体が火を噴かないか真剣におそれつつも、車輪がまだ回っていて指示器がつきっぱなしの自動車にまた潜り込んで鍵を抜いた。私は、膝の上にのせていたアタッシュ・ケースを探し回っていた（窓から飛び出し、5メートルほど離れた草むらに落ちていた）。

マーケット・デイだったのが悪かった。事故現場の少し前、先行する自転車がランドクルーザーを避けようとして茂みに突っかかり、転倒した。私もひやっとしたのを覚えている。しばらくして茂みから子供が飛び出した。あわててハンドルを右に切った先にはマンゴーの木があった。さらにそれをかわそうと左に切るとそこにあった蟻塚に乗り上げて事故は起きたのだった。蟻塚はちょうどいいジャンプ台になり、右側フェンダー側から接地して縦に三回転して裏返しに止まったのである。

よく見ると田原さんは指から血を流している。怪我をしていた。骨折も疑われる。あわててバンダナで応急処置をした。

しばらくして、茂みから人が集まってきた。喉がからからだったから、出されるままに灰色に濁った水を飲んだ。いろいろ考えたが仕方なくボダボダ（自転車タクシー。クッションをつけた荷台に人を乗せて運搬する）を呼んでもらい、アチョワに一度帰ることにした。

さすがのオウジロットも驚いていた。先生を連れにランドクルーザーでソロティに向かったはずの三人がボダボダで戻ってきたのだ。

その後、アムロンはそのままアクムに帰すことにし、ダニエルを伴いマーケット帰りのバスに乗って急いでソロティ・ホテルに行ったのだが、先生はいない。もう午後2時で、予定の時刻をとうに過ぎていたので、当然といえば当然であるが、病気の具合はどうなったのだろうか。仕方なくピックアップを運転手付きレンタカーとして独自に頼んで事故現場に向かった。「先日もそのカーブでひっくり返って2人死んだんだ。誰も死ななくてラッキーだったね」と運転手。

事故現場に着くと、不思議なことに完全にひっくり返っていたはずのランドクルーザーは、タイヤを地に着け立ち直っている。



裏返しになったランドクルーザー（撮影田原範子氏）



ブッシュから道路に戻そうとする（撮影田原範子氏）

アチョワに向かおうとする私たちの前に、そろりそろりと白いセダンがアチョワ方面から走ってきた。運転席に座っていたのは長島先生だった。熱が若干下がって待っていたのだが、なかなか迎えが来ない。誰かが病気になったとか、田原さんがマーケットに見とれて時間をとられている可能性も含めていろいろ原因を考えたが、論理的に考えて「事故」しかない結論づけた。ソロティ・ホテルでいろいろ聞いて、たぶんソロティで一台しかないだろう、という貸し出しに対応している自動車を借りて現地に来たとのこと。ひっくり返っていたランドクルーザーも、人を集めて元に戻し、さらに道路まで戻すための人集めをしてきたところだという。

「君たちは、役場にもポリスにもレポートしていない。海外では事故にあったら、最初にポリスだ。問題を一気に解決するために今日中にソロティに運んで行く」

ソロティまでのながいながい牽引作業が続いた。何しろ、ワイヤーなどというしやれたものはない。ランドクルーザーとそれを牽引するピックアップを結んでいるのはサウリヤコ・マーケットで買った、シュロ縄のようなものだ。植物の繊維を編んでつくったそれは、ランドクルーザーの重量を牽引するには、弱すぎる。途中何度も切れたそれを、その都度ダニエルがむすびなおす。先行する先生の顔にも、運転席に座ってハンドルを切る田原さんの顔にも疲労の色が濃くなってきた。

「おい、ウメヤ、窓ガラスについている白いものは何だ」「私には何も見えませんが」「なに、あれが見え

ないのか」「はい」そんな奇妙なやりとりが行われた。先生は疲労のあまり、幻覚を見ているようだった。マラリアがぶりかえしているのかもしれない。

夕暮れ、ようやくソロティの警察署に着いた。ここでもトラブル。警察の敷地に許可なく侵入したとかで、ピックアップの運転手が逮捕されそうになる。交渉の末何とか運転手は解放されたが、ピックアップは翌日まで返してもらえなかった。ダニエルが警察を恐れず、執拗な交渉をしようとするのを先生が制止した。

警察官の第一声は「何人死んだのかね？」だった。

夜のマラム・ロードをまたアチョワまでとろとろと帰り、ほっとするのも束の間、台所で先生が「ウメヤー」と叫んでいる。「あのびっしり張りついた虫はなんだ」「私には何も見えませんが」「あれが見えないのか」ダニエルを呼んで証言させたが、半信半疑である。

長島先生は一度も田原さんも私も責めなかった。田原さんは、くやしい、といって涙した。「おれの調査はいつもラッキーの連続だったんだが、今度ばかりは…」ウイスキー・グラスを手にとって呟いた。「君たち、寝るなら眠りなさい。おれは今夜は地獄まで行くからよ」といってボトルからウイスキーを注いだ。

ところが、寝ようすると、田原さんが使うはずのマットレスがなかった。「ウメヤー！数を間違えたのかー！」と怒号が飛ぶが、記憶の糸をたぐり寄せると、アキテン・イマチュレットにねだられて先生があげてしまっていたのだ。

翌日、ソロティ郵便局で大使館に報告するときも一波乱あった。薬代をまだ支払っていないエングル病院に電話をかける約束をしていたので、手が離せなかった。自力でかけてもらおうと先生にテレフォン・カードを渡すと、「ウメヤ、カードが入らないんだよ」「私がかけるときにはそんな問題は起こったことはないです」「おれには何でも起こりうるんだっ！（怒）」ウガンダの公衆電話用テレフォン・カードは日本のものとは違い、カードの全部が機械に吸い込まれるタイプではない。

大使館の渡辺書記官は、ゴリランド・サファリ社に早速レンタカーの手配をしてくれた。早ければ夕方にはハイラックス・サーフが着くという。夕刻、ソロティ・ホテルで待っていると遠くから近づいてくるヘッドライトの明かりがあった。リチャードとサンデーというふたりのパイロットが、トヨタ・ハイラックス・サーフに乗っていた。「今からアチョワに向かってくれるか？」「ヤッ」二人そろって短く答えてきばき行動するのが頼もしかった。もう夜も遅く、真っ暗だったが、先生は小屋の外で待っていた。

それから、調査チームにふたりのパイロットが加わった。運転手つきの場合、ゴリランド社からかなりの出張費が出ていて、飲食も寝泊まりも運転手が自力ですることになっていた。「そうと知っていれば」大使館の渡辺書記官からも、ゴリランド社のリディアからも反対されたセルフ・ドライブを強硬に押し切った先生はちょっと後悔しているようだった。彼らは屋敷のな

かにテントを張ってそこで寝泊まりした。アキテンがリチャードに一目惚れしたらしく、われわれによりもかいがいしく世話を焼くので、彼らも居心地が良さそう。先生は特にリチャードがお気に入りです。その後も何度も指名していた²⁵。

VII

こんな事故が起きても、フィールドワーカーはフィールドを離れたくないものである。浜る長島先生と田原さんにカンパ行行きをせまる、渡辺書記官の粘り強い説得で、2月10日には、田原さんが単身カンパに行くことになった。大使館とゴリラランド・サファリ社に事故の報告するためである（翌11日にはアチョワに）。次にカンパに出たときにもっと細かい報告書を提出しなければならないらしい。

事件はこれにとどまらなかった。15日には、デスクを外に出して月明かりを見ながら仕事をしていた先生が蠍に刺されるという事件が勃発した。「うああ」とうなり声をあげる姿を見て、ダニエルは、「プロフェッサーは、男（マン）だ、本当の男だ」と妙な関心の仕方をしている。近くの診療所で注射を打ってもらい明け方にはほぼ回復したが、蠍の種類によっては命が危なかったとか。「おれはわかった。身をもって体験した。蠍は痛い」と何度か呟いていた。

例の事故以来、私はずっと微熱と食欲不振と不眠に苦しめられていた。たまに眠っていてもひどい寝汗をかき、不快感で目を覚ます。「かわいそうに、病気で」と先生は、同情的だった。あばらの一部も痛むので、ソロティ病院でレントゲンを撮ってもらったが異常は見つからず、改善されないのでもカンパに行って診察を受けたが原因不明。ソロティ病院の診察とレントゲンは、なぜか無料だった。もっともこれは誰でもというわけではなさそうで、同乗していたアムロンは別な日に同じくソロティ病院で診察してもらったが、ずいぶん診察費を取られた、と先生はこぼしていた。アムロンは、首に多少違和感があり、いままではジェリカン二つ分の水を頭に乘せても何ともなかったのだが、という。ジェリカン一つは20リットルだから、二つで約40キロである。

私はこの間、LC1レベルの裁判（ネイティヴ・コート）を追っていた。少し前の選挙で、ダニエルが81票を獲得し（有効票は108票）、事務総長に選ばれていたのだ²⁶。議長もやる気満々で、ウィッチクラフトを

含むいくつものケースを平行して解決していた。

21日、前日のマーケットでは食堂になっていたあずまやで裁判を傍聴していると、ハイラックス・サーフのエンジン音が聞こえた。マケレレの調査チームがやってきたのだ。昼食はソロティで食べてくるのでは、と裁判が始まる前に予想していたのだが、ちょうど昼どき。昼食を準備しなければならない。あわててオフィスに戻ると先生がランチョンマットを準備している。

「タイミング悪いですねえ」

このひとことで先生は激怒した。おれが調査を我慢してコーディネーターに徹しているのに、お前がそんなことをいうな、しかも具合が悪い癖に無理して裁判の調査をしやがって、ということのようだ。この日から私と先生との間には陰湿な空気が漂っていた。もうついて行けないような気がしていたのだ。

3月に入って、先生との関係も、私の健康状態も、ますます悪くなっていた。朝、お湯を沸かすこと、スープを温めること、夕方暗くなるまでにランプのホヤを磨いて、各小屋に届けること（先生のは火をつけてほんの少しだけ炎が見える程度に絞っておく）、オフィスのプレッシャー・ランプを着火すること、以上のルーティーンはこなしていたが、裁判からも足が遠のいていた。当時の私は、アlicoやアムロン、ジュニアに「ケロシンマン」と呼ばれ、灯油や明かりの管理者としてだけ存在意義があるかようになっていた。ケチがついたから、というわけでもないが投げ出してしまったネイティヴ・コートの代わりにはじめた商店の品揃えと価格についての調査は、裁判ほどには熱中できなかった²⁷。

3月4日に松田素二さんが合流した。早速田原さんの後見人として滞在村アクムを訪問した。事故を起こしたことに対するお詫びと事後処理を手伝ってくれたことに対するお礼、そして田原さんが今後も滞在することを認めてくれるか意見を求めるためである。伝聞だが、この訪問も順風満帆ではなかったらしい。村に到着し、颯爽と車を降りたと思われた松田さんは、歩いていたひよこを踏みつぶしてしまった。ぎょっとする松田さんと村の人々。謝りに来て損害を与える、という結果になったのである。着いたばかりの松田さんも、早々にアチョワ事件簿に一件つけ加えたことになる。

それからしばらくした頃、ついに決定的な口論があって、クビを言い渡された。

長、青年委員会議長、障害者委員会議長である。

²⁷ もっとも、物品の調査の過程で、キャンプで何か必要かわかったこと、例えば町でダース26,000/=のジェリカンを買ってきてひとつ2,500/=で売るなど、どこも卸値と小売値との差額で合理的かつ堅実な商売をしていること、自転車の部品は驚くほど揃っていてボールを枠に入れてグリスを流し込む自作のボールベアリングも含めて、かなりの水準の修理技術をそなえていることがわかったのは収穫だった。調査に協力的だったオシアの店は、当ても品揃えがよかったが2006年現在彼はアチョワで一番多くの牛を所有する富豪となっている。

²⁵ リチャードは、この後、ゴリラランド・サファリ社を離れ（このことは、オーナーのサイラスの不興を買った）、USAIDの開発プロジェクト、DISH (Delivery of Improved Services for Health) の運転手をしてしたが、プロジェクト終了とともに失職。その後何度かトロロでも運転を頼んだ。2006年5月、病のため急死。

²⁶ Local Government Act, No.1 of Section48 (1997年3月24日公布)により、最小の地方行政単位であるLC1にも国会を模したような役職が置かれている。議長、副議長、事務総長、教育・流通秘書、保安、金融、環境保全秘書、女性委員会議

「ソロティまで送って行ってやるから、カンパラでもトロロでも勝手に帰れ」とのこと。本気で助手をやめて日本に帰ろうと思っていた。3月4日に合流した松田素二さんに、「まあまあ、ウメ、そう言うな」と言われて、何とか思いとどまった。

松田さんのとりなしと田原さんの癒しのおかげで先生との決定的な破綻を見ることなく、3月28日にエンテベを離れた。



オコリモ（上）とオウジロット（下）2002年10月

VIII

こんなぎくしゃくした関係ではあったが、その後の先生の尽力で、1999年9月13日から私はJICAの専門家としてプロジェクトの正式メンバーとして迎えらるることになった。しかし、わたしは自分の任地となったセントラルのムピジ県チェゴンザ・サブカウンティでの調査を貫徹できずに神経を病んで2000年2月末に中途帰国することになった。病は長島先生と田原さんの幻覚を白昼見る、という強烈なものだった。先生や大使館の方々、関係者には大変な迷惑をかけた。申し訳ないの一言しかない。そのこともあってこのプロジェクトは、JICAでも評価されず、むしろ失敗例とされてしまったようだ。

1999年2月の病も、2000年2月の病も、究極的には原因はよくわからないままだ。周囲の人間はジュジュ、つまり呪いだと言っていた。

とりわけ2000年の病は想像以上に重く、一時は社

会的に全てを失ったような気がしていた。特に社会的に何か持っていたわけではないが、それでも2001年には笹川科学研究助成金がもらえることになり、ウガンダを訪れ（トロロ県）、前年お世話になった飯田吉輝公使に最初にお礼とお詫びをしに訪ねなかったことでちょうどウガンダにいた長島先生のお叱りを受けた。帰国後よりによって結核に罹患した。2ヶ月半の入院生活は暗く、アフリカ研究も文化人類学も、もうやめようと思った時期もあった。アチョワとの縁も切れたかに見えた。

しかし、ほかに何ができるわけでもない。運良く年齢制限ぎりぎりですぐに再び日本学術振興会特別研究員（PD）に採用されて研究が続けられるようになるまでは、まさにお先真っ暗という感じだった。

アチョワとの縁は切れなかった。フィールドノートを繰ってみると、2002年10月1日、長島先生の助手、ダニエル・アルオとともに干ばつに苦しむアチョワを訪れている。その直前、先生に「京都大学人文科学研究所国際シンポジウム・国際人類学民族学会議（IUAES）2002 京都会議」で出会った際に預かった20,000円とその後アルオの給料1,200USD（プロジェクトが完了するまで助手の給料が全く支払われないので長島先生が立て替えることにしたのだ）とともに届けられた200USDとをオウジロットに届けた。配分がまた変わっていて、オウジロットに200USD、オコリモには200円だそう。ジュニアは、アチョワの役場に勤めていた。もう携帯電話を持っているから、と番号を教えてくれた。事故後大使館との連絡のためにソロティ郵便局の公衆電話まで通ったことを思うと隔世の感がある。

その年の干ばつは本当に深刻で、食料を持って行ってやった方がいい、とトロロの私の家の大家²⁸が言うので、異種混交の豆の存在²⁹を教わり、米60キロ、ポーショ（トウモロコシの粉）2袋、豆200キロ、塩10パケット、クッキングオイル4リットルとともに運んだ。田原さんにもお金を預かっていたので、米40キロ、ポーショ一袋、豆100キロ追加。



現在ソロティーカンパラ間を結ぶテソ・コーチには

²⁸ オウオリ夫人は、有機農法の現地NGOの運営が大統領に評価されてRDCに任命されたこともあって、農業の新しい動向にも詳しくあった。

²⁹ K132（ケーワン・サーティ・トゥー）。カウェンペにあるFICA（Farm Inputs Care Centre LTD）を通じて入手できる。

「テソの誇り」と、反政府ゲリラ「神の抵抗軍」(LRA)に抵抗した自警団「アロー・ボーイズ」の文字が(2006年8月)

2003年6月、反政府ゲリラ「神の抵抗軍」(LRA)が、突如アチョワに侵攻したという報道に驚く。8月には政府は住民の武装を認め、自警団アロー・ボーイズが結成された。彼らの安否を気遣う長島先生もウガンダを訪れる予定とのこと。この年はアチョワには行かなかったが、7月31日にアチョワを去り、当時カンパラ郊外に住むイトコ宅に下宿してカウェンペのマガンジョ職業訓練校に通っていたダニエル・オチュネとマケレレ・ゲストハウスで8月12日に面会している。彼は、LRAが侵攻してきたときのことを言葉少なに語ってくれた。最新兵器で武装した強力な軍隊だったそうだ。その後、ゲリラは派遣された国軍によって撤退するが、国軍の兵士の身の回りの世話をしていたダニエルの妻は、撤退する国軍兵士と行動をとともにした、という。今子供は父オウジロットが育てている、とも。陽気だったダニエルの顔から笑顔が消えていた。

翌2004年8月4日、渡しておいた100USD分の食料を積んだランドクルーザーでアルオがトロロにいる私を迎えに来ることになっていた。その後、アチョワに。前年のLRAがの侵攻で、アチョワの人口34,000人のうち400人が死んだという。身内では少年一名が拉致され行方不明となっており、二名が殺された³⁰。

ダニエルは自動車修理工の資格は取ったものの仕事が見つからず、カンパラにいた。南テソ民族がいるトロロでの就職を含めていろいろ当たってみたが、難しそうだった。偶然にもマケレレ・ゲストハウスのレセプションистの父親が昔ウスクでオウジロットの同僚だったことがわかり、彼が力になってくれることになったのは救いだった³¹。



LRAへの怒りを露わにするオコリモ (2004年8月)

³⁰ その年アクムを訪れた田原さんによれば、アクムでは、小屋に立てこもっていたところ、燃料をかけられ小屋ごと焼かれた人も数多くいる、という。小屋の扉は、軒並み持ち去られた。焼かれた小屋の中には、田原さんが住むはずだった(結局一度も住んでいない)小屋もあった。

³¹ もっとも2006年現在、ダニエルから彼には連絡はないという。

IX

LRAの侵攻は生き残ったアチョワの人にも底知れないダメージを与えた。特別研究員の任期も切れた2005年、東北学院大学に奉職した最初の年は、ウガンダ行きこそ自粛したが、すでに携帯電話をもつようになったアチョワのジュニアとは連絡を取り合っていた。しかし、あまりいい知らせはなかった。ジュニアは、足を骨折して重体。シニアも健康を害しているという。「エデケ(神ないし悪霊と訳しておく)の仕業だ」とも。「エデケはすべての不可解な現象、混乱、無秩序に対する究極的説明であり、同時に反秩序に対する神秘的制裁力(すなわち秩序維持力)の根源でもある、といえそうである。つまり、エデケは世界の存在原理であり、そこにエデケの恐ろしさがあるといえはしまいか」³²相手が「世界の存在原理」では、事態は深刻である。だが、電波状況のよくないアチョワの携帯との国際電話では、わからないことが多すぎた。



ソロティ・マーケットの喧噪 (2006年8月15日)

幸運なことに2006年、まして年齢制限ぎりぎり応募した科学研究費補助金(若手研究(B))がもらえることになり、また8月にアチョワを訪れた。まだ日本を発つ前にジュニアに電話したところ、体はもういいというのでほっとしていた。なぜかシニアのことになると歯切れが悪いとは思ったが、あまり気にしていなかった。

8月14日、米の安いムバレのナムポロゴマで100キロ(90,000/=)。翌8月15日、ソロティ・マーケットで豆100キロ(63,000/=)、クッキングオイル5リットル(9,500)、砂糖5キロ(9,000/=)を積んでアチョワに向かう。

今回初めてビデオカメラを積んでいた。ソロティ市街からマラム・ロードに入り、感慨深い事故現場を通って、アチョワへの道行きを私はカメラをほとんどずっと回していた。

予想では、長島先生の屋敷の前に車が停まった途端にジュニア夫妻が飛び出して来るはずだった。しかし、誰も出てこない。裏に回った。先生が毎晩デスクを出して月を見ながらガラスの底を眺めていた、蠅の出現した裏庭には、洗濯をする見知らぬ娘がいた。「オウジロットはどこですか?」「どのオウジロット?」「ステ

³² 『テソ』75頁。

イーヴン」役場よ、アムリアの」要領を得ないやりとりが続いた。信じられないことだった。LRA が駐留しているときですらアチョワ・キャンプに居座っていた、キャンプの守り神のようなオウジロットを、しかも彼の屋敷のど真ん中で探す羽目になろうとは。

「役場で働いているスティーヴンのお父さんのこと。ムゼー（老人）！」私は声を張り上げた。「ああ、あの」

指さす方角には、老人が腰掛けていた。ビデオカメラを回しながら、ゆっくり近づいた。できれば見つからないように。久しぶりの邂逅を驚きからはじめたかった。

驚いた。彼は、脳梗塞で半身不随となっていた。「おまえはこの知らせを受けていなかったのかね。脳の半分をやられて、うまく喋れないんだ」しかも、アムリアにいるジュニアとは絶縁状態らしい。オウジロットは、慎重にゆっくり言葉にしていく。オコリモとダニエルが飛んできて、彼の言おうとすることをまとめようとする。カンパワで職探しに失敗したダニエルは「村に帰れ」という先生の助言を容れて帰ってきたのだという。

長島先生は、彼に 200USD の送金を二回約束した。最初の 200USD は、封筒に入って通常郵便で届けられた。しかし、二回目が届かない。もうジュニアを信用することはできない。私が動けないのをいいことにあいつが盗ったにちがいない、とオウジロットはうなった。

私はしばらく逡巡したが、財布から 200USD を取り出し、オウジロットの目の前に並べていた。私が長島先生の実子と信じるアチョワの人々の前では、それが取り得る正しい唯一の道であると信じた³³。

「みんな、知っているだろう、プロフェッサー・ナガシマは嘘つきじゃない、何か理由があるはずだ、だが、父の約束はまず息子がこの場で果たそう」

「もう誰も信用できない」とオウジロットは呟く。「銀行口座への入金にはダニエルに任せたら」という私とオコリモの提案を即座に拒絶した。田原さんの名前が出たときに笑みを見せたが、自分を取り巻く状況の不自由さと、それから来る不機嫌さを隠さなかった。

アチョワ・キャンプを率いていたオウジロットの影響力は、見る影もなくなっていた。キャンプの人々は、みな彼がいないものとして扱っていた。肺炎を患うオコリモは、自分たちの世代の将来を悲観した。

帰り際にダニエルがオウジロットから見えないような角度で無心。「ごめん、また今度」レンタカー代とガソリン代を除くと、本当に有り金全部だったのだ。ことの顛末を先生に報告した³⁴。実際には、郵便で送金することの危険性を考えて送金を控えていたのだ。

³³ もちろん、オウジロット、オコリモは、私と長島先生に血縁関係がないことは知っているはずである。

³⁴ そういうつもりではなかったが、物資の額についても報告したところ、長島先生から程なくして 300USD が郵送されてきた（もちろん通常郵便）。

ジュニアは無実だったわけである。オウジロットには、説明して誤解を解いたが、もはや病を得て頑迷になったオウジロットは容易に納得しなかった。

先生は、個人主義的な性格の強いテソ民族は社会組織として、常に決裂、分裂する要素をもつ、と考えているようだ。そもそも、「友人とは潜在的な敵である」³⁵とされる社会である。ダニエルがかつて語った「人間（マン）は泥棒」という人間観も、そのような傾向を裏づけているかも知れない。



職がなく村に帰ったダニエル（2006 年）



プロフェッサー・ナガシマへ伝言を語るオウジロット（2006 年）



自分の境遇を筆者に話すオウジロット（2006 年）

X

以上が現在語りうる、私と長島信弘先生と、アチョワについての断章である。先生の依頼文には、「私は学

³⁵ 『テソ』 84 頁。

問・性格共にどちらかといえば「悪名」寄りの人生を歩んできたと自覚しておりますので、この際手厳しい御批判を受けるのも一興とおおらかな気持ちであります」とあった。批判ではないが、なかには通常は語るのをはばかれるようなことも、あえて書いてみた。「人間が生活していて、それを理解しようとすれば、きれいごとですむはずがない」³⁶人類学をやっているのだから。また、「書くことにタブーを課さないのが俺の原則。書きたいことを書いてくれ」³⁷という力強い言葉もいただいている。

このように、これまでアチョワとのかかわりに出会った事件は数知れない。ランドクルーザーの事故はこちら側の問題だからひとまず措くとしても、昔からの問題であるカリモジョンの襲撃、LRAの侵攻、ダニエルの妻との別離、オウジロットの病とジュニアとの絶縁など。アチョワ以外でも先生とも田原さんとも親しくしていたリチャードの急死などここでは書ききれなかったことも多い。

さて、私は一連の経験を通じて『テソ民族誌』を読んで感じた、最後の「わからなさ」を克服できたか。答えは「否」である。わからなさは、もっと深まり、複雑になってきた。

確かに経験してわかったことはいくつもある。テソビールの味や彼らの「裁判好き」³⁸は実感を伴って観察した。カリモジョンにも会った。しかし、つきあいが深くなればなるほど、また新たな疑問がわいてくることも事実である。

社会や個人は、生きている限り現在進行形で変化しており、完成形態ではありえない。しかもそれらの認識のもとでとなるはずの経験の頼りなさ。それらを考えて思い浮かぶのはまたしても『テソ』の一節である。対象自体に反復性、恒常性、整合性を期待できないという不確定性、文化を個人が内面化していく過程と結果には個人差があること、秩序感覚をもたない外部者にとって資料や分析モデルにはつねに検証困難なずれやひずみがつきまとうこと³⁹。『テソ』で前提となっていたこれら三つのことを私は身をもって理解しつつあるのかもしれない。

従って、というわけでもないが、この雑文にも「オチ」らしい「オチ」はない。ありえない。また今年も8月には、私は彼らに会いに行くことだろう。そしてまた新たなエピソードが、私のフィールドノートにつけ加えられるに違いない。

さらに、本稿で書かれたことのいくつかについては、長島先生や田原さん、松田さん、など同じ時間・空間を共有した人の中からですら、異論が出ることは想像に難くない。フィールドに誰かとともに赴き、その経験の解釈をつきあわせてみると、不思議なことに、人

間は見たいものしか見ていないことに嫌と言うほど気づかされる。事実認識の理論負荷性というほどのものではない。それは理論以前のものである。それが、この雑文の副題として『『テソ民族誌』異聞』と名づけた所以である。

長島先生に初めて会ったときのことを今でもよく覚えている。1993年12月18日から20日にかけて当時まだ西ヶ原にあった東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所と慶應義塾大学で開かれた「アフリカ・米・日アフリカニスト会議」の最終日、G・マイケル教授とI・N・キマンボ教授の講演会の席だった（慶應義塾大学三田キャンパス西校舎513教室）。公演の中の親族関係の専門用語に同時通訳が詰まったとき、フロアから「そのままです」⁴⁰とひとこと発言した人物がいた。凄まじい存在感。

もとよりフロアからの発言が求められている場ではない。前日までの分科会でもレセプションでも見かけなかったその人物の顔をのぞき込んで驚いた。著書の著者近影や一橋大学の大学案内⁴⁰で写真を見たことがあったのでそれと知れた。

当時先生は学会にも姿を現すことがなかったから、アフリカ研究を志したばかりの私にとっては活字だけで名前を知る、雲の上の人だった。その後、ありったけの勇気を振り絞って、いまでは少なくなった構内廊下の灰皿で煙草を吸う先生に、ワープロ（まだワープロ専用機で、パソコンは持っていなかった）でつくった名刺で自己紹介した。一瞥するや名刺に刷られた「宗教人類学専攻」という名乗りに対し、「宗教人類学？」と首を傾げて唸り、「人類学を細分化してはいけません、どなたかの悪影響を受けておられるのではないですか」と初対面にして批判された。そのとき感じた頑固親父ぶりは、今もって変わらないように思える。

最近の論考で、「主観と客観の間の境界は広大で複雑だ」⁴¹と長島先生は言う。私が誤解していないとすれば、この表明は、ともすればこのずれを最小限にする努力なくして「間主観性」という観念に乗っかって何か言ったつもりになってしまう風潮に対する、「最後のシマウマ」⁴²からの頑固親父らしいお説教である。たとえそれがかつて語り合った仲間との決裂や分裂を意味するとしても。

⁴⁰ 先生は『競馬の人類学』（1988年、岩波新書）の著者として1988年にJRA馬事文化賞を受賞しており、それを大学広報が用いていたと記憶する。

⁴¹ 長島信弘「長島信弘（1937-）『死と病の民族誌—ケニア・テソ族の災因論』岩波書店、1987」小松和彦、田中雅一、谷泰、原毅彦、渡辺公三編『文化人類学文献事典』2004年、弘文堂、536頁。

⁴² 長島信弘 2003、上掲論文、30頁。

³⁶ 長島信弘『死と病の民族誌—ケニア・テソ族の災因論』（1987年、岩波書店）、435頁。

³⁷ 2007年1月16日、電子メールによる私信。

³⁸ 『テソ』112頁。

³⁹ 『テソ』i-iv頁。